

## 第2章 子どもにつけたい力

### 基本目標1 確かな学力の定着



主体的に学習に取り組む姿勢と、基礎的・基本的な知識や技能及び思考力・判断力・表現力を養うことにより、確かな学力の定着を図ります。

- 1 問題解決能力向上のための授業づくり
- 2 少人数教育の効果的な活用
- 3 ICTを活用した教育の充実・発展
- 4 外国語活動・英語教育の充実
- 5 遊びを通しての「学び」の充実





# 1 問題解決能力向上のための授業づくり

## ◆ ねらい

基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに、身に付けた知識・技能を基に情報を収集したり、他者と協働的に課題解決したりする授業を推進することで、子どもの問題解決能力の向上を図ります。

授業改善にあたっては、子どもの学力の実態把握と分析に基づく授業づくりを推進するとともに、「問題解決能力向上のための5つのプロセス（四日市モデル）」※<sup>1</sup>により、多様な学び合いや言語活動（説明、討論、記録、要約など）を充実させます。

また、家庭と連携した家庭学習の定着によって学校での学習を補完し、確かな学力の定着を目指します。

※1 四日市モデル…本市が作成した「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」などに掲げている問題解決能力向上のための5つのプロセスをいう。

## ◆ 取り組み指標とその評価

H30までは全60校、R1からは全59校

| 取り組み指標  | 現状値<br>H27 | H28 | H29             | H30             | R1              | R2 | 目標値         |
|---|------------|-----|-----------------|-----------------|-----------------|----|-------------|
| ①「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」活用推進協力校※ <sup>2</sup> の数（校） | 5          | 5   | 5<br>〔延べ〕<br>10 | 5<br>〔延べ〕<br>15 | 5<br>〔延べ〕<br>20 |    | 5年間で延べ25校   |
| ②「四日市モデル」を指導案に位置付け、授業研究を行った学校数（校）                     | —          | 23  | 37              | 44              | 59              |    | 全小・中学校（59校） |

※2 活用推進協力校…「5つのプロセス（四日市モデル）」に基づいた授業研究を行い、その成果と課題を明らかにする学校である。年度末に指導案例などを含むレポート報告を行ったり、研修会で発表を行ったりする。

### ○ 取り組み指標①

活用推進協力校から活用事例の収集及び公開授業研修会等を実施することで、問題解決能力を育む授業づくりの啓発を図りました。今後も、四日市モデルを授業づくりの根幹にした授業改善を進めていきます。

### ○ 取り組み指標②

「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック2」（以下「ガイドブック2」）で、四日市モデルの活用について具体例を挙げて啓発したことで、目標値に達しました。今後も、要請訪問の際には5つのプロセスと照らし合わせた指導・助言を行ってまいります。

### ※「問題解決能力」とは

本市では、「問題解決能力とは、解決の道筋がすぐには明らかでない問題に対し、身に付けた知識・技能や収集した情報、体験等を活用し、問題を解決していく力」と定義しています。日々の授業で、問題解決的な学習に取り組むとともに、「確かな学力（知）」「豊かな人間性とコミュニケーション能力（徳）」「健康・体力（体）」を教科・領域等横断的にバランスよく育むことにより、子どもたちは自分で学習する力を身につけ、社会人になっても通用する問題解決能力の養成を図ります。





## 第2章 子どもにつけたい力 基本目標1 確かな学力の定着

### 基礎的・基本的な知識・技能の定着

#### ◆ 具体的な施策の現状と課題

本市では、全国学力・学習状況調査問題の趣旨を踏まえ、平成25年度1月から、以下の4つの取り組みを進めています。

##### 【取り組み1】本調査問題の活用

- ・全教員で問題を分析して授業改善の視点を明確にしたり、問題を再活用して課題の解消につなげたりする。

##### 【取り組み2】本調査趣旨等を踏まえた授業改善

- ・「言語能力」や「知識・技能を活用する力」の育成を目指した授業を推進する。  
(例 考えを筋道立てて説明する、目的等に合わせて文章をまとめる、複数の情報を比較して考える等)
- ・調査結果の分析から自校の強み・弱みを把握し、授業改善につなげる。

##### 【取り組み3】学習習慣の確立と学力補充の充実

- ・宿題の工夫、家庭学習の定着、学校での補充学習の充実を図る。

##### 【取り組み4】継続的な学び

#### (1) 平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査より

(調査対象：小学校6年生、中学校3年生)

小中学校5教科のうち4教科において、全国平均以上または同等の結果でした。各教科の調査問題や結果等について分析し、課題を以下のように捉えています。

※「全国平均以上または同等」とは、平均正答数において小数第1位までの値を全国と比較し、判断しています。

|       |   |
|-------|---|
| 国語    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「漢字」「接続語」「ことわざ」の理解と活用。(小)</li> <li>・話し合いの話題や方向を捉える力の育成。(中)</li> <li>・書いた文章を読み返し、論の展開を考えて、語句や文の使い方を検討する力の育成。(中)</li> </ul>         |
| 算数・数学 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・示された考えを解釈し、条件を変更して数量の関係を考察し表現する力の育成。(小)</li> <li>・統合的・発展的に思考する態度の育成。(小・中)</li> <li>・事柄が成り立つ理由について、筋道を立てて考え、説明する力の育成(中)</li> </ul> |
| 英語    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・まとまりのある文章を聞いたり、読んだりして、概要や要点を捉える力の育成。</li> <li>・自分の考えを表現する言語活動を設定し、内容面と言語面の指導の充実。</li> </ul>                                       |

※結果や分析の詳細は、本市のホームページに掲載しています。

<https://www.city.yokkaichi.lg.jp/www/contents/1598234544188/index.html>

四日市市 全国学力

本市の課題改善に向けて、学力向上研修会等を開催し、具体的な授業改善の方向性や指導方法等を提示しました。

また、本市の課題解決に向けた指導事例等を紹介した「全国学力・学習状況調査結果の分析冊子」や、市内の授業実践事例をとりまとめた「授業づくりヒント&ポイント」を作成し、全教員へ配付しました。



## 第2章 子どもにつけたい力

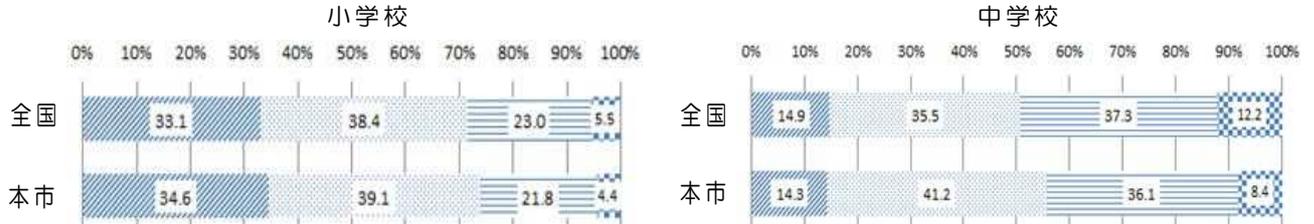
### 基本目標1 確かな学力の定着

#### (2) 平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙より

(単位：%)



#### <家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか>



上記のとおり、小・中学校とも「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」という質問に対して、肯定的回答（当てはまる、どちらかといえば、当てはまる）が全国を上回っています。小学校では「家庭学習の手引き」、中学校では「シラバス（年間指導計画）」を配付するなど、家庭と連携した取り組みが定着していることが分かります。

また、全ての小・中学校において、春季休業中の宿題を準備して、学びの空白期間をなくし、継続的な学びができるよう取り組んでいます。

さらに、各学校で行われている保護者懇談会等にあわせて、保護者・地域向けのリーフレットを配付し、本市の現状をお知らせするとともに、家庭学習の充実に向けて、保護者への啓発を行いました。

#### (3) 標準学力検査（NRT）結果より（偏差値）

|        | 小学校5年生 |      | 中学校1年生 |      | 中学校2年生 |      |
|--------|--------|------|--------|------|--------|------|
|        | 国語     | 算数   | 国語     | 数学   | 国語     | 数学   |
| 平成30年度 | 50.9   | 49.8 | 50.9   | 51.2 | 50.4   | 51.1 |
| 令和元年度  | 49.6   | 49.1 | 51.1   | 50.3 | 51.0   | 51.6 |

#### <各教科に見られる課題>

小学校国語：ことわざについて理解することや修飾と被修飾の関係、接続語

小学校算数：資料の分類整理、公式などのいろいろな式

中学校国語：語句や表現方法についての理解

中学校数学：1年生は資料の活用、2年生は全国平均より低い項目なし

#### ◆ 今後の方向性

全市的な課題については、学力向上研修会等において全校に対し、指導・助言を行うとともに、各教科の研究協議会と連携し、課題の改善に取り組みます。

各学校の課題に対しては、学校ごとの指導体制を見直し、指導の改善・充実を働きかけたり、各学校に訪問指導したりします。さらに、全国学力・学習状況調査結果や具体的な取り組みを各学校の学校だよりやホームページ等で発信し、学校・家庭・地域が共通した認識をもって、学力向上の取り組みを進めるよう働きかけます。

各中学校区において、キャリア教育とともに、小中の系統性を意識した授業改善や指導方法を、学びの一体化の柱とすることで、確かな学力の育成を図っていきます。

### 第3次四日市市学校教育ビジョン「基本目標1-① 問題解決能力向上のための授業づくり」

## 言語活動の充実

### ◆具体的な施策の現状と課題

#### (1) 小・中学校における取り組み状況

国語科を中核にして確かな言語能力を育成するためには、ねらいに応じた言語活動を設定し、子どもたちの実態に合わせて系統的に指導していくことが大切です。

学校訪問の際には、授業の中で設定されていた言語活動が子どもたちの資質・能力の向上や主体的・対話的で深い学びにつながっていたかを検証し、指導・助言しました。

各校では、各教科の授業だけでなく、学年集会・学校集会等でも発表する機会を設定しています。総合的な学習の時間や各教科の学習内容、児童会・生徒会活動での発表など、各校の工夫した取り組みとして、すべての学校教育活動の中で行われています。

#### 言語活動の充実「中学生スピーチコンテスト“THE BENRON”」

本市では、毎年8月に「中学生スピーチコンテスト“THE BENRON”」を開催しています。市内の中学生が、今日的な社会状況等に目を向け、自分の考えを筋道立てて表現します。各中学校においては、このコンテストに向けて、「話す」力を育てる単元を組んだり、コンテストで学んだことを還流する場を設定したりしています。

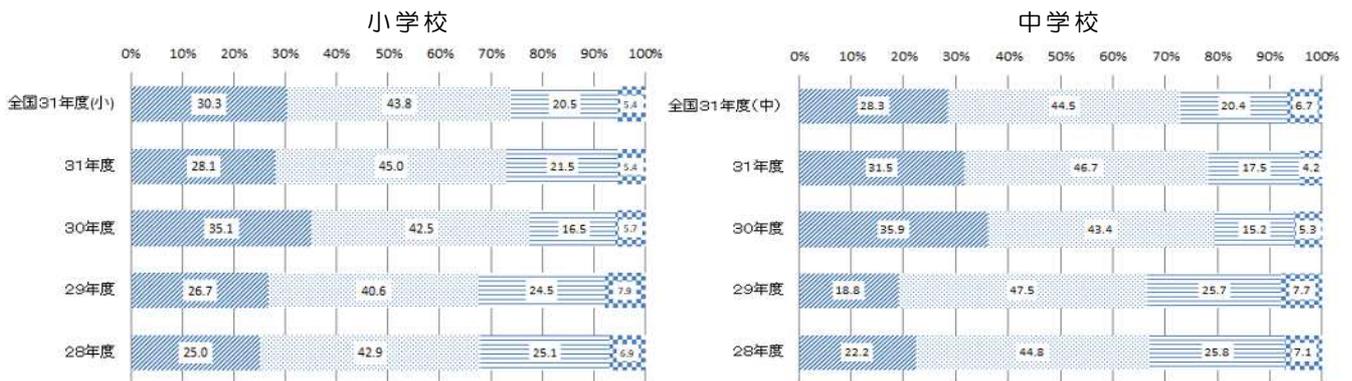


「中学生スピーチコンテスト“THE BENRON”」8月17日

#### (2) 平成31年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙より（単位％）

下記の項目について、全国と比較して、小学校では肯定的回答の割合が若干低かったものの中学校では全国を上回っています。

＜学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか＞



#### (3) 教育実践研究推進校区の取り組み

令和元年10月9日に羽津北小学校、12月5日に羽津中学校で、公開授業研究会を実施しました。助言者の早稲田大学小林教授からは、問題解決的な授業につながる学習課題や子どもたちの主体的な姿を引き出すポイントなどの指導を受けました。



## 第2章 子どもにつけたい力

### 基本目標1 確かな学力の定着

#### ◆ 今後の方向性

「言語活動の充実」においては、言語活動の設定を目的とするのではなく、その活動を通して各教科の目標を実現すること、さらに子どもの言語能力を育成することが重要です。そのため、言語活動の中でどのような言語能力を身に付けさせるのかを明確にして、単元や授業を進めていきます。

また、日々の教育活動の中で「書くこと」を習慣化したり、表現する場を設定したりするなど、言語を使いこなす機会を大切にすることで、子どもたちのコミュニケーション能力や論理的思考力を高めていきます。

#### 「四日市モデル」を活用した授業づくり

##### ◆ 具体的な施策の現状と課題

子どもたちの問題解決能力向上を図るために、実践事例を掲載した「ガイドブック2」の活用による授業改善を各校で推進するように働きかけてきました。

その結果、「四日市モデル」を指導案に明確に位置付けて授業研究を行った学校は、全小中学校となりました。

##### (1) 問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック活用推進協力校事業

活用推進協力校5校を指定し、協力校ごとに研修主題を設定するとともに、「四日市モデル」を指導案に位置付け、子どもたちの問題解決能力の向上に視点を置いた授業づくりを進めました。

| 活用推進協力校名 | 研修主題   |
|----------|--|
| 三重小学校    | 仲間とともに主体的に学び合う子どもの育成<br>～言語活動の充実を通して～          |
| 浜田小学校    | 共に学び、自ら高め合う子の育成                                |
| 内部小学校    | 子どもの気づきをつなぐ授業づくり<br>(研修の力点) 子どもの思いや考えが深まる課題を探る |
| 橋北中学校    | 「問題解決プロセス」と「4つの力」を意識したキャリア教育の充実                |
| 港中学校     | キャリア教育の視点を大切にした教育活動を通して、生きる力や学びに向かう生徒を育成する     |

##### (2) 公開授業研究会や教職員研修講座での「四日市モデル」の推進

活用推進協力校や教育実践研究推進校区※<sup>3</sup>では、「四日市モデル」を指導案に位置付けた授業や研究会を公開しました。また、研究の成果を教職員研修講座等で紹介し、問題解決能力向上のための授業づくりについて、教員の理解が深まるよう働きかけました。



※3 教育実践研究校区…P80「幼保小中の連携を生かした教育『学びの一体化』の充実」参照

学力向上・授業づくり研修会

- 教職員研修講座では、「四日市モデル」を元にした授業改善の取り組みについて紹介を行い、教員の理解が深まるように働きかけました。助言者の早稲田大学小林教授からは、「四日市モデルは、新学習指導要領の理念に即したものである」との助言を受けました。
- 研修担当者会や各校での研修会等において、参加者が授業づくりのイメージを持てるように、指導主事等が「四日市モデル」について具体例の紹介や、授業の流れについて解説を行いました。
- 若手教員授業づくり研修では、「四日市モデル」を指導案に位置付けるだけでなく、事後研修会では「四日市モデル」のプロセスにそって、KJ法で授業を振り返りながら授業改善について協議しました。



授業改善で活用されている  
「ガイドブック2」

#### ◆ 今後の方向性

問題解決能力向上に向けて、「四日市モデル」の活用は、新学習指導要領においても、その理念・考え方は有効であることを研修会で働きかけていきます。また、各小・中学校における校内研修会では、指導主事が授業での具体的な子どもの変容を通して「四日市モデル」を位置づけた授業研究、授業改善についての指導・助言を行います。

今後は、国家戦略として一人一台のコンピュータ端末が導入されることから、新教育プログラムの趣旨を踏まえた「問題解決能力向上のための授業づくり」とICTの効果的な活用についての研究（ICT活用実践推進校事業）を進めていきます。

## 2 少人数教育の効果的な活用

### ◆ ねらい

子どもたちの問題解決能力や学力の向上をめざし、ティーム・ティーチングや習熟度別学習等の指導方法を取り入れるなど、少人数教育の効果的な活用に努めます。

また、学級規模を小さくすることにより、児童生徒の学級や学校生活への適応を図り、「小1プロブレム」「中1ギャップ」の解消を目指すとともに、基礎学力の定着、学習規律の確立を目指します。

### ◆ 取り組み指標とその評価

H30までは全60校、R1からは全59校

| 取り組み指標                             | 現状値<br>H27 | H28 | H29 | H30 | R1 | R2 | 目標値            |
|------------------------------------|------------|-----|-----|-----|----|----|----------------|
| 学級集団編制を工夫し<br>少人数指導を実施した学校<br>数（校） | —          | 60  | 60  | 60  | 59 |    | 全小中学校<br>(59校) |

全校において、教室を分けた少人数指導やティーム・ティーチング、過密学級を解消するための学級編制等、子どもの実態に応じた少人数教育を実施しています。今後も、単元、授業のねらいや学校、子どもの実態等に合わせた効果的な少人数教育を進めます。

### ◆ 具体的な施策の現状と課題

#### (1) 小学校1年生及び中学校1年生における30人以下学級編制の実施

小学校低学年と中学校1年生では、よりきめ細かな指導を行う目的から、1学級あたりの人数を少なくした三重県の「みえ少人数学級」「少人数加配学級」などの措置を行っています。さらに、本市独自に、小学校1年生と中学校1年生においては、「30人学級(下限なし)」を実施しています。

これらの施策によって、平成25年度から小学校1年生で、平成23年度から中学校1年生で、学級の児童生徒数が小規模となり、子どもの成長や発達段階に応じたきめ細かな指導を行うことが可能となっています。

#### (2) 少人数編制による指導体制の充実

国から配置された加配教員と、市単独で配置した非常勤講師等を活用した少人数教育を、小学校37校、中学校22校のすべての学校で実施しました。

また、子どもの状況等必要に応じて、加配教員を活用し、1学年の学級を増やし、学級集団の規模を小さくしている学校もあります(加配学級)。

多くの小学校では、算数科において少人数指導が取り入れられています。単元、授業のねらいや学校、子どもの実態等に応じて、ティーム・ティーチング、学級(学年)を複数集団に分けた少人数指導、習熟度別少人数指導などを取り入れています。また外国語活動では、令和2年度からの小学校高学年での英語教科化に向け、英語専科教員と担任等とのティーム・ティーチングによる指導を行っています。

**1 ■ ■ ■ 第2章 子どもにつけたい力**  
**■ ■ ■ 基本目標1 確かな学力の定着**

中学校では、2・3年生の数学科や英語科を中心に、少人数指導が取り入れられています。

＜令和元年度少人数指導実施状況 小学校 37 校中 教科別実施校数＞

|    | 国語 | 社会 | 算数 | 理科 | 生活 | 音楽 | 図工 | 家庭 | 体育 | 道徳 | 外国語活動<br>外国語 | 総合 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--------------|----|
| 小1 | 7  |    | 12 |    | 3  | 0  | 2  |    | 2  | 0  |              |    |
| 小2 | 6  |    | 16 |    | 3  | 0  | 2  |    | 2  | 0  |              |    |
| 小3 | 8  | 2  | 32 | 2  |    | 1  | 0  |    | 3  | 0  | 6            | 2  |
| 小4 | 3  | 0  | 34 | 2  |    | 1  | 0  |    | 1  | 0  | 6            | 1  |
| 小5 | 2  | 0  | 32 | 8  |    | 0  | 0  | 0  | 2  | 0  | 37           | 2  |
| 小6 | 1  | 0  | 29 | 6  |    | 0  | 1  | 0  | 1  | 0  | 37           | 1  |

＜令和元年度少人数指導実施状況 中学校 22 校中 教科別実施校数＞

|    | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 | 音楽 | 美術 | 技術<br>家庭 | 保健<br>体育 | 道徳 | 総合 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----------|----------|----|----|
| 中1 | 1  | 1  | 10 | 1  | 3  | 2  | 0  | 1        | 1        | 2  | 5  |
| 中2 | 1  | 0  | 16 | 2  | 12 | 9  | 0  | 1        | 5        | 1  | 5  |
| 中3 | 3  | 1  | 17 | 4  | 15 | 5  | 2  | 1        | 4        | 1  | 5  |

各学校においては、三重県教育委員会が作成した「効果的な少人数指導推進ガイドブック」（平成30年3月、「効果的な少人数指導推進ガイドブック vol.2」（平成31年3月）等を参考にしながら、各校の実態に合わせて工夫した少人数教育が進められています。

その結果、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査において、本市の算数・数学は、全国平均と同等以上の結果でした。また、児童生徒質問紙においても、「算数・数学の授業内容はよく分かりますか」といった項目において、肯定的な回答をした割合が全国平均を上回っています。

また、本市が進める問題解決能力向上のための授業づくりでは、指導者が子どものつまづき等を的確にとらえ、既習事項を想起させたり、友だちの考えとつなげたりして、子どもたちが主体的・対話的に学ぶことを大切にしています。そのためには、指導者が子どもたち一人ひとりの学ぶ姿を的確に見取ることが必要です。指導者一人当たりが見る人数の少ない、少人数教育は、本市を進める授業において、今後も維持していくべき指導体制であると考えています。

**◆ 今後の方向性**

今後は、これまで算数・数学を中心にして積み上げてきた少人数教育の効果的な活用方法を土台としながら、習熟度別指導を中心にして更なる研究を進めていきます。

### 3 ICTを活用した教育の充実・発展

#### ◆ ねらい

子どもたちがICTを活用して、自らの考えを表現し、互いに学び合う主体的で対話的な学習を推進することで、問題を解決する力を育成するとともに、子どもたちの実践的な情報活用能力（情報モラルを含む）の向上とプログラミング的思考の育成を図ります。

#### ◆ 取り組み指標とその評価

| 取り組み指標                              | 現状値<br>H27 | H28 | H29 | H30 | R1 | R2 | 目標値 |
|-------------------------------------|------------|-----|-----|-----|----|----|-----|
| ICTの効果的な活用事例の紹介を行う、市教委主催研修会の実施回数（回） | 3          | 3   | 4   | 5   | 7  |    | 5回  |

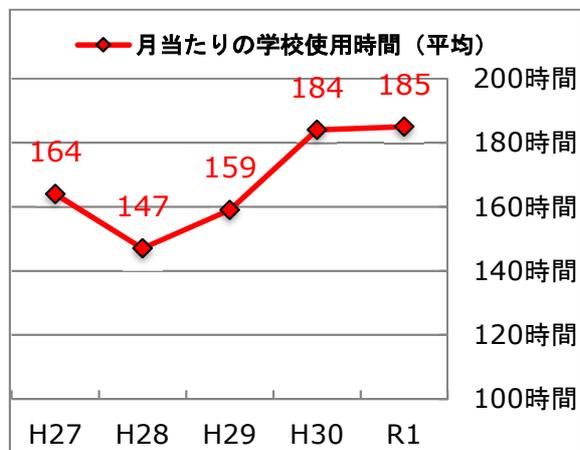
※ R1年度の内訳：初級ICT活用研修（中1回）、導入機器活用研修（小3回）、プログラミング教育実践研修（3回）

現在導入されているICT機器を効果的に活用するため、初級ICT活用研修を1回、導入機器活用研修を3回実施しました。また、小学校におけるプログラミング教育の実施に向け研修会を3回実施し、目標値を達成しました。今後も、実践的な研修会を実施し、子どもたちの情報活用能力を育成します。

#### ◆ 具体的な施策の現状と課題

本市では、令和元年度に小学校の普通教室等において、児童がICTを活用した学習を日常的に行える手立てとして、学習者用タブレット端末を各校40台配備するとともに、全小学校（37校）へのICT活用出前研修を行い、効果的な活用を促す取り組みを進めています。

また、平成21年度以降順次配備した大型提示装置（電子黒板やプロジェクタセット）については、デジタル教科書や各種資料などを拡大提示するなど、授業における活用が進み、各学校におけるひと月当たりの使用時間（平均）は185時間となりました。



令和元年度ICT活用調査の結果



ICTを活用した授業（小学校）



プログラミング示範授業（小学校）

**1 ■ ■ ■ 第2章 子どもにつけたい力**  
**■ ■ ■ 基本目標1 確かな学力の定着**

今後は国の方針に基づき、一人一台学習者用コンピュータを中心としたICT環境を段階的に整備していく必要があります。また、指導者が、児童・生徒につけなければならない力を明確にしたうえで、「一斉学習」「個別学習」「協働学習」を柔軟に選択し、新学習指導要領が示す「問題解決能力」や「情報活用能力」等を育成するための「主体的な学び」「対話的な学び」を実現できるよう研修を進めていく必要があります。

**学校におけるICTを活用した学習場面**

各教科等の指導でICTを活用することは、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や「主体的・対話的で深い学び」の実現や、個に応じた指導の充実に資するもの。

| A 一斉学習  | B 個別学習   |   | C 協働学習   |  |
|---|--|---|--|--|
| <p>挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。</p>   | <p>デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易となる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。</p>           |   | <p>タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあう学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>                  |  |
| <p>A1 教員による教材の提示</p>  <p>画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用</p>       | <p>B1 個に応じる学習</p>  <p>一人一人の習熟の程度に応じた学習</p>    | <p>B2 調査活動</p>  <p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録</p> | <p>C1 発表や話し合い</p>  <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p> | <p>C2 協働での意見整理</p>  <p>複数の意見・考えを議論して整理</p>      |
| <p>B3 思考を深める学習</p>  <p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p> | <p>B4 表現・制作</p>  <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p> | <p>B5 家庭学習</p>  <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>          | <p>C3 協働制作</p>  <p>グループでの分担、協働による作品の制作</p> | <p>C4 学校の壁を越えた学習</p>  <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p> |

※「学びのイノベーション事業」実践研究報告書(平成26年)より

◆ **今後の方向性**

○ **ICT環境の整備**

授業等で日常的にICT機器を使用できるように、国の方針に基づき大型提示装置や一人一台の学習者用コンピュータの拡充、デジタル教科書等のデジタル教材の整備を進めます。

全校に導入した校務支援システムについては、働き方改革の視点から学校の業務改善と教育の質の向上につながる活用を推進していきます。

○ **授業等におけるICT活用の推進**

互いに学び合う協働的な学習による問題解決能力の育成や、基盤的な学力の確実な定着、さらには児童生徒一人一人の能力や適性に応じた学びを実現するために、より効果的なICTの活用方法、活用事例を紹介していきます。

また、プログラミング教育や学習者用コンピュータを活用した授業について、先進事例等を参考に研修・研究を進めていきます。

○ **教職員のICT活用指導力の向上**

ICTコーディネータ研修会、夏季教職員研修会だけでなく、指導主事が学校に出向いて行う出前研修を全ての小中学校で実施します。また、授業での活用例や操作方法を紹介するICT活用メールを全教職員に定期的に送信します。

## 4 外国語活動・英語教育の充実

### ◆ ねらい

グローバル化する社会において、自らの思いや考えなどを積極的に発信する異文化コミュニケーションを促進するため、ネイティブの英語指導員と接しながら、教室で英語を使うための環境づくりと指導体制を確立し、小学校外国語活動及び英語教育の充実を図ります。

### ◆ 取り組み指標とその評価

H30までは小学校全38校、R1からは小学校全37校

| 取り組み指標                                     | 現状値<br>H27 | H28 | H29 | H30 | R1 | R2 | 目標値           |
|--|------------|-----|-----|-----|----|----|---------------|
| ①小学校5・6年生において英語専科教員による授業を導入した学校数(校)        | —          | 2   | 12  | 38  | 37 |    | 全小学校<br>(37校) |
| ②「CAN-DOリスト※」を設定し、シラバスを配付するなどして公表した中学校数(校) | 2          | 1   | 4   | 9   | 11 |    | 全中学校<br>(22校) |

※「CAN-DOリスト」…文部科学省が推奨している英語科における学習到達目標

#### ○ 取り組み指標①

平成30年度に引き続き、全小学校に英語専科教員を配置し、英語専科教員を中心とした英語指導体制づくりの構築ができました。

#### ○ 取り組み指標②

全中学校が、4技能5領域での「CAN-DOリスト」を作成し、半数の学校が公表できました。有識者を招聘した研修会を行い、公表の意義などを確認しました。

### ◆ 具体的な施策の現状と課題

#### (1) 英語教育の取り組みについて

##### ○ 小学校における取り組み

令和2年度の新学習指導要領全面実施に向け、3・4年生は35時間、5・6年生は70時間の授業を先行実施しました。教科化を踏まえ、引き続き、英語専科教員と学級担任によるチーム・ティーチングによる授業を実施しました。担任と英語指導員(以下「HEF※<sup>1</sup>」という。)によるチーム・ティーチングを、年間1・2年生で3時間程度、3～6年生で6時間程度実施し、授業内外で児童が言語や文化を体験的に学べるようにしました。

県主催の外国語公開授業研修会で、本市の小学校が授業公開を行い、有識者から直接、Small Talkの指導手順や単元最終の言語活動の設定についてなどを学び、新学習指導要領の全面実施に向けての準備を進めました。

また、教員が自信をもって英語の授業ができることを目指し、四日市市英語指導員(以下「YEF※<sup>2</sup>」という。)による小学校教員向け英会話教室「YEF English Lab」(希望制)を定期的に開講しました。

## 1 ■ ■ ■ 第2章 子どもにつけたい力

### ■ ■ ■ 基本目標1 確かな学力の定着

#### ○ 中学校における取り組み

令和元年度からYEF14名体制（昨年度比1名増）となり、5校（南中、常磐中、朝明中、山手中、大池中）で常駐しています。また、中学校区英語推進校の西笹川中学校と笹川小学校には、同じYEFを配置し、小中連携を図りました。

令和元年度も、即興で話す力の育成を目指し、3学期には1・2年生を対象に全中学校で、共通のパフォーマンステストを実施しました。

令和元年度に初めて行なわれた英語の全国学力学習状況実施調査では、本市は全国平均を上回る結果でした。しかし、自分の考えや思いを英語で伝えることには課題が見られました。生徒が自分の考えや思いを英語で伝えられるよう、授業の中で、英語を話す必然性のある場面を設定していく必要があります。

中学校2・3年生で英検IBAを実施し、「聞くこと」「読むこと」の英語力の測定、学習の成果の確認や目標設定など、生徒の英語学習を支援しました。両学年とも、昨年度より、平均スコアが上昇しています。2年生：607.6点（H30 605.6点）3年生：751.1点（H30 747.3点）6月時点で、2年生は5級レベル以上が9割を超え、3年生は4級レベル以上が8割を超えており、全体的には、前学年までの学習内容は概ね身に付いていると言えます。本結果を活用し、英語の授業改善に役立てます。

#### ◆ 今後の方向性

#### ○ 教室で英語を効果的に学ぶ環境の整備

引き続き、高学年で英語専科教員と学級担任によるティーム・ティーチングを実施します。HEFを3名から6名に増員し、児童が生の英語に触れる機会を増やします。

中学校2・3年生に加え1年生でも、英検IBAを実施し、グローバル化に対応できる英語力の測定、学習の成果の確認や目標設定など、英語学習に対して支援を行います。

生徒のコミュニケーション能力を育成するため、英語担当教員とYEFによるティーム・ティーチングの時間増及び授業内外での英語環境の創出のため、YEFを2名増員し16名体制へと拡充します。

#### ○ 異文化理解を図り、国際的な視野を広げる機会の提供

小学校では、英語キャンプを継続して実施し、学校や年齢を超えた交流を行う中で、英語を使った体験活動を通して、英語でのコミュニケーション能力の育成を図ります。

#### ○ 英語担当教員の英語指導力向上

小学校英語実践推進校の実践を基に、市内全小学校で英語専科教員を中心とした英語指導体制を構築し、会議等で実践推進校の研究成果等を他の25校にも普及します。

中学校では、国の調査官を招聘した研修会を実施し、新学習指導要領の全面实施に向けて準備を進めます。

#### ○ 新教育プログラムにおける発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成

英語であいさつをしたり、地域の紹介をしたりする活動など、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を通じたコミュニケーション能力の育成を図ります。

##### ※1 HEF（「Haken English Fellow」の略）

本市で直接雇用していない教育委員会在籍外の英語指導員。本市では、派遣業者による英語指導員を小学校に派遣している。

##### ※2 YEF（「Yokkaichi English Fellow」の略）

本市で直接雇用している教育委員会在籍の英語指導員。本市では、姉妹都市提携をしているアメリカのロングビーチ市出身の英語指導員と国の「語学指導等を行う外国青年招致事業（JETプログラム）」により採用している英語指導員を中学校に派遣している。



英語キャンプの様子

## 5 遊びを通しての「学び」の充実

### ◆ ねらい

幼児が主体的に自己を発揮し、好きなことや楽しいことに集中し、夢中になり、遊ぶことを通して総合的に学んでいくための環境構成を進めます。

また、園での遊びについて、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へと意識できるような活動を計画し、小学校との円滑な接続を図ります。

### ◆ 取り組み指標とその評価

| 取り組み指標                    | 現状値<br>H27 | H28 | H29 | H30 | R 1 | R 2 | 目標値              |
|---------------------------|------------|-----|-----|-----|-----|-----|------------------|
| 遊びを豊かにするための実践研究*を行った園数(園) | —          | 6   | 6   | 6   | 6   |     | 全公立幼稚園・こども園(22園) |

本年度新たに6園が実践研究を行いました。遊びを通しての「学び」そして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を意識することで、保育内容や環境構成の充実に向けて取り組み、公開保育及び研究協議をし、職員の資質向上につなげていきます。今後も、毎年4～6園ずつ実践研究園を指定し、推進します。

\*実践研究…公開保育を実施し「遊びを通しての学びの充実」に関して指導と評価の推進を図る

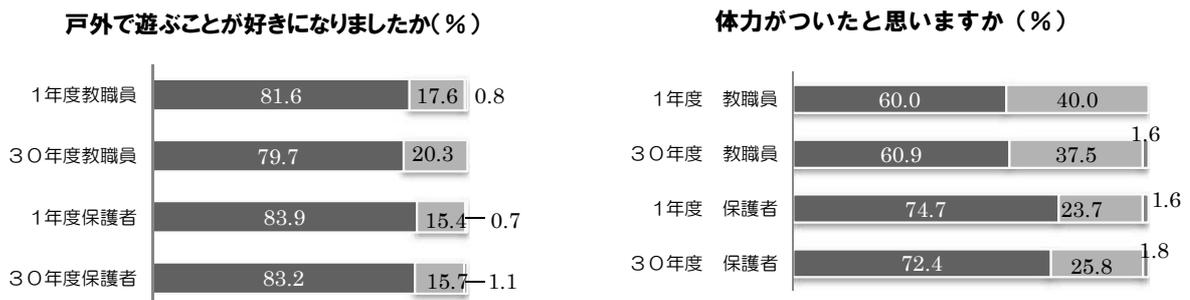
### ◆ 具体的な施策の現状と課題

#### (1) 幼児期にふさわしい経験・体験の充実

保護者・教職員対象に実施した『学校教育ビジョンアンケート』の結果から「戸外で遊ぶことが好きになりましたか」「体力がついたと思いますか」「遊びの種類や生活体験が増えましたか」の項目において、「そう思う」「おおむねそう思う」と答えた教職員・保護者は共に98%以上となっています。一方では、「歩くことで脚力がついたと思いますか」の項目では「そう思う」「おおむねそう思う」と答えた保護者の増加に対して、教職員は昨年度より減少しています。

平成30年度・令和1年度＜保護者・教職員アンケート＞の結果(22園)

■ そう思う □ おおむねそう思う ■ あまりそう思わない・全くそう思わない



## 第2章 子どもにつけたい力

### 基本目標1 確かな学力の定着

歩くことで脚力がついたと思いますか(%)



戸外遊びを楽しめる環境の工夫

#### ○遊び込める体づくりの推進

- 近年の情報機器の発展は、幼児の生活や遊びに大きな影響を与えており、幼児が戸外で体を動かして遊ぶ機会が少なくなっています。

体を動かす心地よさを感じ、進んで体を動かそうとする意欲等を育てられるように、各園で戸外遊びの工夫を行っています。多様な動きが経験できるような遊びを取り入れ、楽しく体を動かす時間を確保し、何度も繰り返すおもしろさを感じることができるよう環境を整えています。戸外遊びが好きになり、体力向上に結びつくよう、今後も主体的に活動できる環境を整え、年間を通して体づくりに向けての活動を計画に位置づけ、保育内容の充実を図っていきます。



園外保育の様子

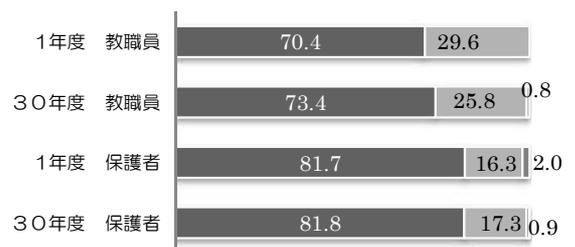
- 園外保育等楽しく歩く経験を計画的に位置づけるとともに、登降園時の徒歩通園を奨励して取り組んでいます。各園で、計画を見直し幼児の姿や園の実情に合わせてながら工夫しています。

#### ○多様な経験ができる環境の充実

- 幼児にとって遊びは重要な学習の場です。また、遊びを通して諸能力が総合的に発達することから、様々な体験ができるよう、環境を整えることが必要です。
- 幼児が主体的に環境に関わり、その中から生まれた遊びを大切にしています。教師が一人一人に応じて丁寧に関わることで、幼児はいろいろな遊びや直接体験をします。遊びや活動の中で
  - 「知識及び技能の基礎」
  - 「思考力、判断力、表現力等の基礎」
  - 「学びに向かう力、人間性等」
 を育てるよう取り組んでいます。

これら3つの「資質・能力」は幼児にとって、重要な学習の場である遊びを通して総合的に育てるものと考えます。

遊びの種類や生活体験が増えましたか(%)



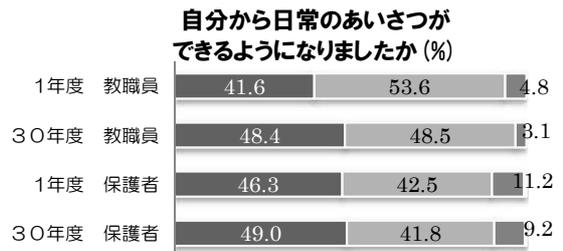
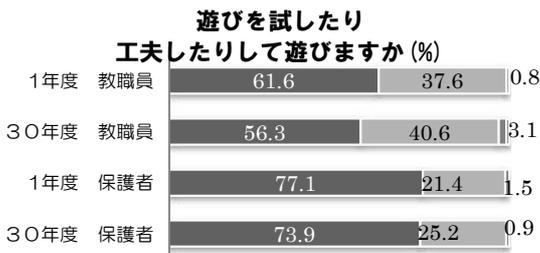
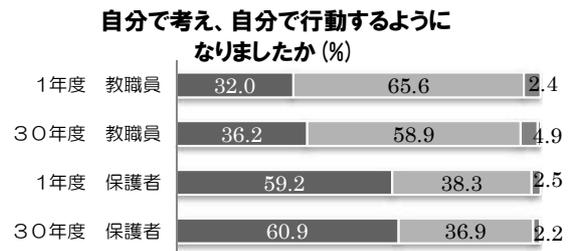
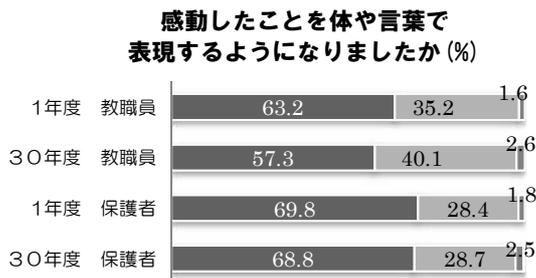
友だちとかかわって遊ぶ中でルールを学ぶ子どもたち

1 ■ ■ ■ 第2章 子どもにつけたい力  
 ■ ■ ■ 基本目標1 確かな学力の定着

(2) 遊びを通した学びの研修・研究の推進について

○非認知能力につながる力の育成

- ・ 幼児期においては、子どもの発達や学びの連続性を踏まえ、探究心や思考力、表現力等に加えて、感情や行動のコントロール、粘り強さ等の非認知能力を育むことが重要です。幼児が夢中になって遊ぶ中で直接的で具体的な体験ができ、いろいろな事象と出会い、主体的に学んでいけるようにしていくことが大切です。さらにその体験を体や言葉で表現し、多くの人と共有していくことが互いの学びにつながります。



- ・ 非認知能力につながる力として「感動したことを体や言葉で表現するようになりましたか」「自分で考え、行動するようになりましたか」「遊びを試したり工夫したりして遊べますか」については、「そう思う」「おおむねそう思う」と答えた教職員・保護者ともにほぼ95%以上となっています。一方、「自分から日常のあいさつができるようになりましたか」については、昨年度より教職員・保護者共に減少しています。
- ・ 人とのコミュニケーションが少なくなっている今だからこそ、園では教師と幼児、幼児同士の温かいつながりを通して、あいさつをする機会を大切にしています。様々な体験をする中で、あいさつをすることの心地よさを味わえるよう、そばにいる人が言葉を交わし伝える姿を示すことで、幼児も人といううれしさや人とつながる喜びを感じていきます。



友だちとかかわって遊ぶ子どもたち

- ・ 遊びや活動する中で、思考をめぐらし、心を動かす豊かな体験が少なくなっています。達成感や満足感を得られるまでの過程を大切にする保育の充実に努めています。
- ・ 幼児が主体的に自己を発揮し、遊ぶことを通して学んでいくための研修を進めていく必要があります。

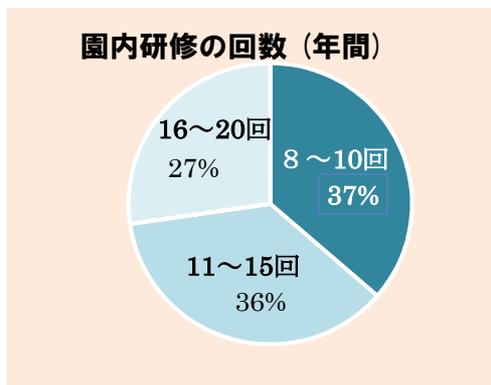
第3次四日市市学校教育ビジョン「基本目標1-⑤ 遊びを通しての学びの充実」

## 1 ■ ■ ■ 第2章 子どもにつけたい力

### ■ ■ ■ 基本目標1 確かな学力の定着

#### ○ SPDC Aサイクルに基づく教育活動の充実

- ・ 遊びを通じた学びの充実に向けて、幼児の発達に応じた教育課程の編成、実施、評価、改善等の研修・研究を行い、指導の工夫を行っています。年間を通して計画的に「園内の日(園内研修)」を設けテーマに沿って研修を行っています。
- ・ 『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を意識して教育内容の可視化に取り組む中で、幼児理解や保育の振り返りを行い、研修を深めることができた園が多くみられました。また他機関との連携研修や他園職員との共同研修など研修体制の工夫をしました。
- ・ 一人一人の幼児の特性に応じた指導や、幼児にふさわしい環境構成の工夫により、園での活動が幼児の発達にとって、より一層意味のあるものにしていくことが必要です。教職員が将来につながる幼児期に育ってほしい具体的な姿を共通認識し、課題をもってSPDC Aサイクルにそって教育実践の充実を図り、資質向上に努めています。
- ・ 園の課題解決に向けて、年間を通して研修を計画的に行い、実践・評価し改善することや教育内容の充実に向けて取り組みを継続していく必要があります。



園内研修の様子

#### ◆ 今後の方向性

- 幼児の実態を把握し、健康で安全な生活習慣の育成を目指し心身ともにたくましく育つ取り組みを継続していきます。また幼児が主体的に遊び、総合的に学んでいけるように、様々な体験ができるような環境を整えて遊びの充実を図っていきます。
- 遊びを豊かにするための実践研究を行う推進園を指定し、公開保育及び事後研修を行い、取り組みを広げていきます。
- 園内研修だけでなく、先進園視察、講演会、実践検討会等の研修を実施し、広い視野での見方・考え方及び教職員の専門性を一層高めることが大切です。一方で現在の職員構成の中では従来の園内研修のあり方に工夫を凝らす必要があります。写真等を使用した研修や他園との共同研修など、研修時間の確保・方法においても工夫に努めます。
- 写真等を使用した研修の中で可視化された園の取り組みや幼児の学びについて、地域や家庭にも発信し理解が深まるようにします。地域・家庭・園という循環の中で幼児の望ましい発達を図っていきます。
- 適切な幼児理解や評価により指導の改善を図り、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へと意識できるような実践事例集を作成していきます。  
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確にしながら、幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性」「一貫性」で捉え、幼児の発達や学びのつながりを踏まえて、小学校との円滑な接続を図っていきます。